

## 820 頸部リンパ節腫大の1例

上原慶一郎、友野絢子、高橋祐一、松岡亮介、平井千浦子、神澤真紀、大谷恭子、  
山崎 隆、川上 史、原 重雄、酒井康裕、伊藤智雄  
(神戸大学医学部附属病院病理診断科)

【症例】60歳代、男性

### 【臨床経過】

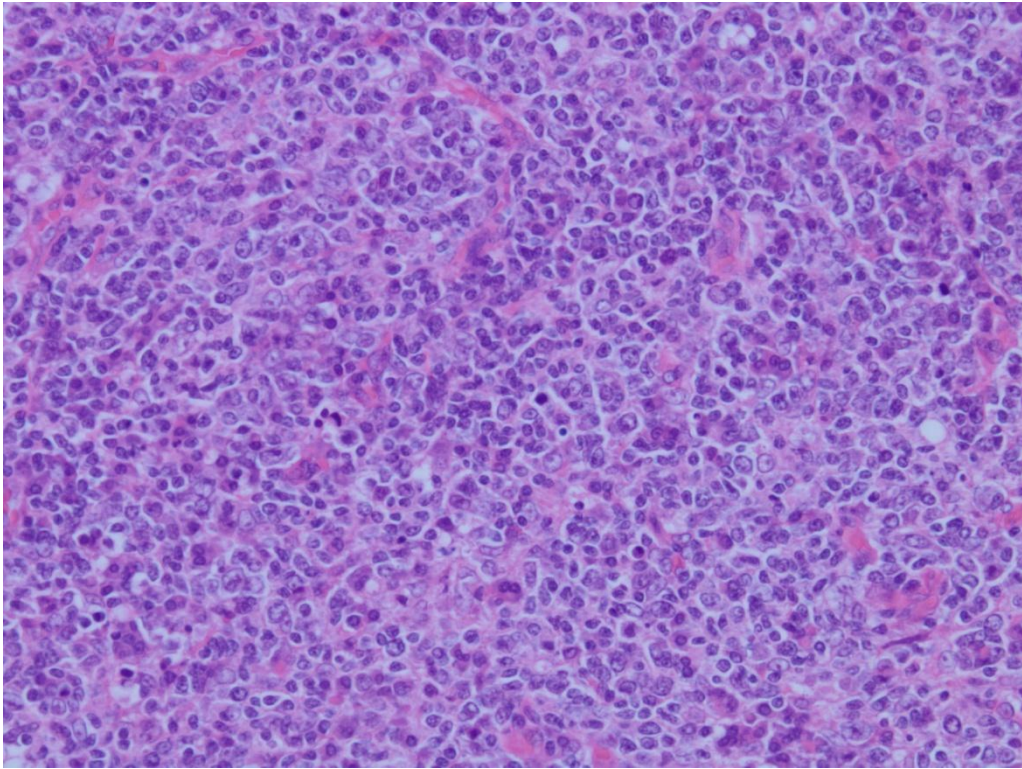
10年程前から、左頸部の腫瘤を自覚していた。3年前には、前医の細胞診にてclassV、PET-CTにて強度集積を認めため、悪性リンパ腫を疑いリンパ節生検が行われたが、非特異的炎症との結果であった。その後も、当院にて定期的に経過観察をされていた。明らかな増大傾向は認めなかったが、患者本人の希望もあり、リンパ節摘出術が施行された。

### 【病理所見】

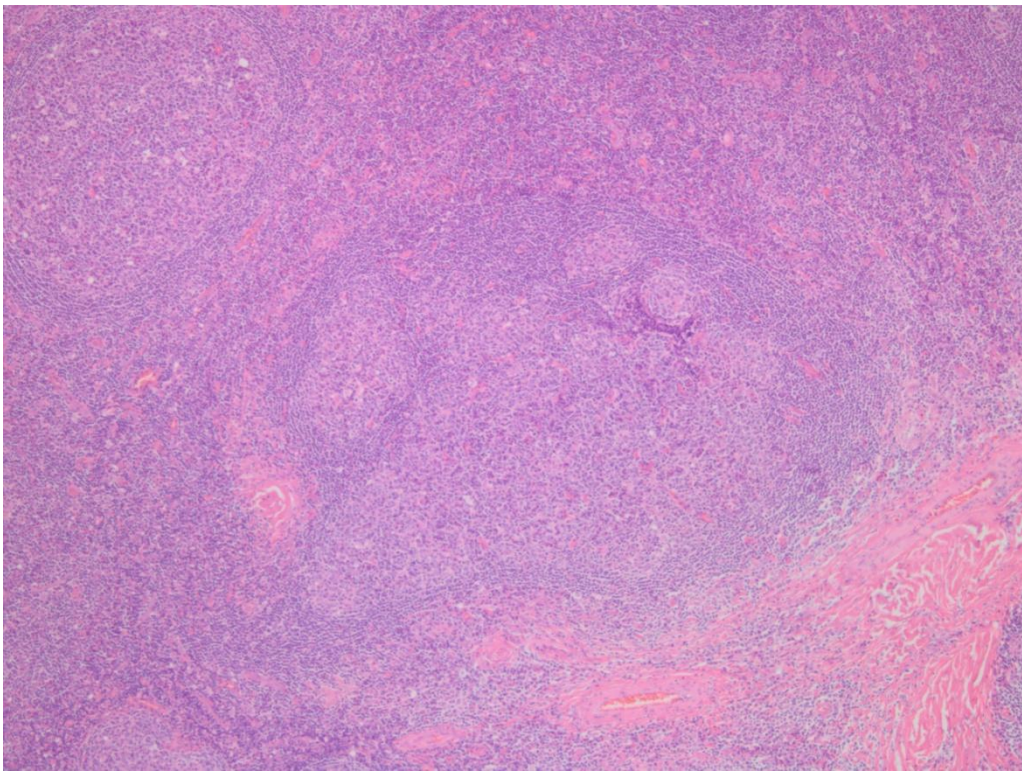
最大径3cmのリンパ節が提出された。組織学的には、大小不同を伴った濾胞構造が認められた。一部にprogressive transformation of germinal center様の不整な胚中心を伴っていた。濾胞間には、好酸球浸潤が散在性にみられた。また、濾胞間・胚中心内に形質細胞浸潤が認められた。

### 【問題点】

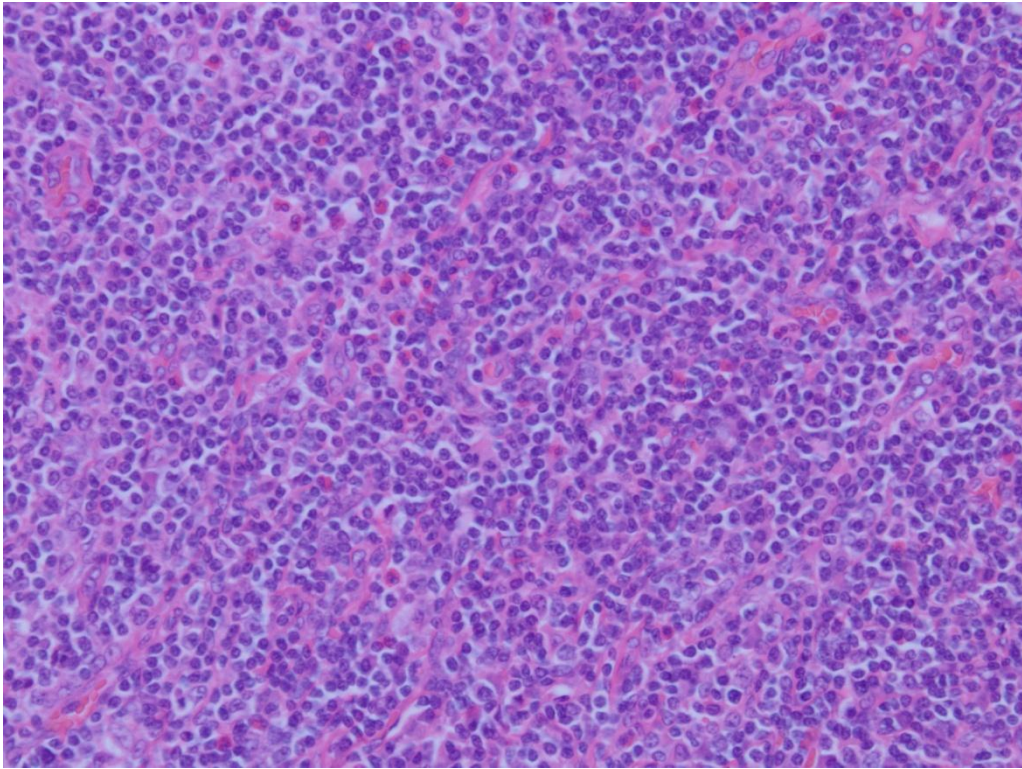
組織診断



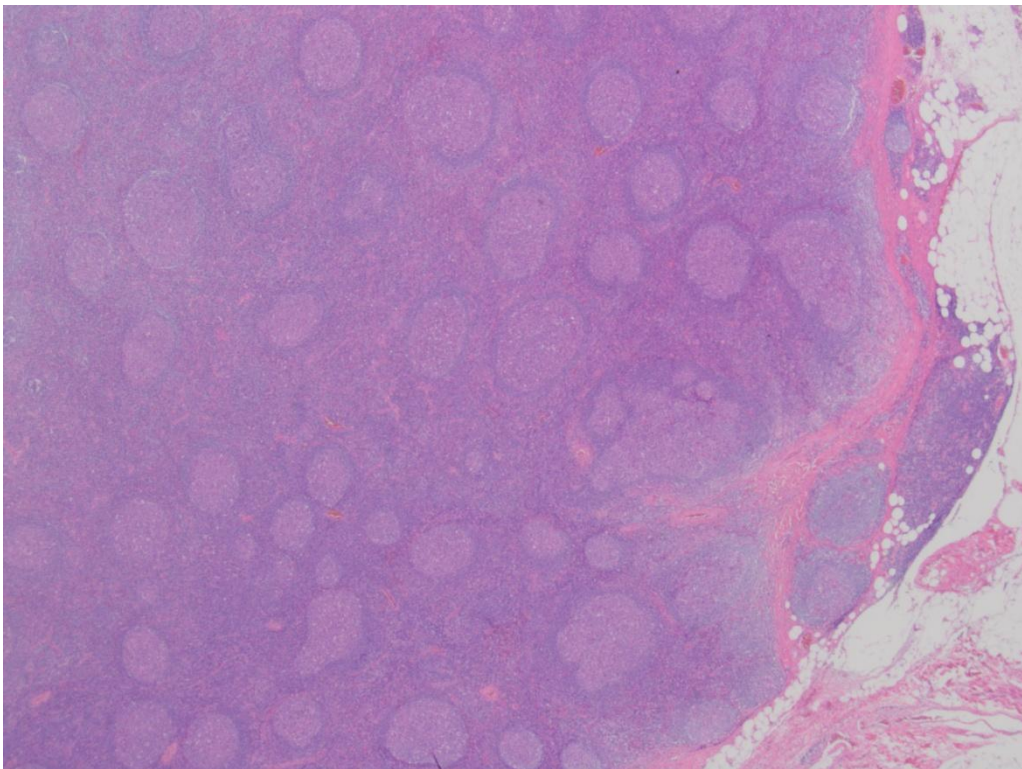
胚中心 (強拡大)



濾胞 (中拡大)



濾胞間（強拡大）



リンパ節（弱拡大）